

# 納得感とは何か

## 主体的学びを後押しする心理学的概念を探る

橋本優花里<sup>a</sup>、小林隆昌<sup>b</sup>、川越明日香<sup>c</sup>、橋本健夫<sup>d</sup>

長崎県立大学地域創造学部<sup>a</sup>、広島大学大学院教育学研究科<sup>b</sup>、熊本大学大学教育統括管理運営機構<sup>c</sup>、  
長崎国際大学健康管理学部<sup>d</sup>

### 目的

納得感とは、教員や仲間等の様々な他者とのやり取りの中で、学習の場や自身の状況を適切に意味づけ、納得していく過程を指し、主体的学びの原動力と考えられている。また、有用感、向上感、達成感、効力感などの多様な心理的感覚を包含するとされている(山地・橋本、2012)。しかしながらこの定義は、長年の教育実践から見出されたものを概念的にまとめたものに過ぎない。

一方、学びという行動を動機づける心理的な感覚の一つに、講義への満足度がある(島田、2017)。本研究で取り挙げる納得感については、満足感との相違について言及されていないため、まずはその違いについて明らかにする必要があるだろう。そこで本研究では、自由記述による調査から学生が納得感や満足感をどのように捉えているのかの言語データを収集し、テキストマイニングを用いて両者の記述に含まれる語の違いを明らかにすることを目的とした。

### 方法

**参加者** 公立および私立の大学生 785 名。

**質問紙** 「大学での授業や学びに関する意識調査」と題し、学んだことについて①満足するのはどのような時か、②納得するのはどのような時か、③満足感と納得感の同異とその理由、④もっと学びたい授業についての自由記述を求めた。

**手続き** 授業時間の 10 分程度を回答時間に充て、直後に回収した。

**分析** 785 件全ての自由記述データを分析対象とした。樋口(2015)を参考に KH Coder(Ver. 2.0)を使用し、頻出語を抽出した。

### 結果

以下、質問①～③の回答の分析について述べる。

表 1 と 2 に①と②の回答の頻出語を示した。両表より、上位 3 つの頻出語が同じである一方で、第 4 位では満足する時には「テスト」が、納得する時には「分かる」という語が頻出している。

③の回答について  $\chi^2$ 検定を行ったところ、「違

う」とする記述が「同じ」よりも多かった( $p<.001$ )。

表 1 「学んだことに満足する時」の頻出語

| 順位 | 語   | 頻度  | 順位 | 語    | 頻度 |
|----|-----|-----|----|------|----|
| 1  | 学ぶ  | 401 | 6  | 知識   | 80 |
| 2  | 自分  | 221 | 7  | 結果   | 77 |
| 3  | 理解  | 125 | 8  | 分かる  | 61 |
| 4  | テスト | 108 | 9  | 良い   | 55 |
| 5  | 知る  | 100 | 10 | 日常生活 | 52 |

表 2 「学んだことに納得する時」の頻出語

| 順位 | 語   | 頻度  | 順位 | 語  | 頻度 |
|----|-----|-----|----|----|----|
| 1  | 学ぶ  | 341 | 6  | 知識 | 61 |
| 2  | 自分  | 252 | 7  | 説明 | 59 |
| 3  | 理解  | 245 | 8  | 内容 | 43 |
| 4  | 分かる | 82  | 9  | 知る | 42 |
| 5  | 実際  | 62  | 10 | 思う | 38 |

### 考察

満足感と納得感については、多くの学生が異なると考えていることが明らかになった。また、両者に関する記述から、いずれにおいても学んだことを理解した時に得られる感覚であることが示された。しかしながら、満足感では「テスト」や「結果」などの語が頻出されたことから、自身のアウトプットが有効であった時に得られる感覚として捉えられていることが示された。一方、納得感では「分かる」などの語が頻出されたことから、自身へのインプットとのかかわりの中で生まれる感覚である可能性が示唆された。

### 引用文献

- 山地弘起 (2012) 学生の納得感を高める大学授業. ナカニシヤ出版, 東京
- 島田英昭 (2017) 大学授業の満足度を規定する要因—期待一致・代替魅力・自己適合の効果の比較. 信州大学教育学部研究論集, 11, 175-180.